

ポローニア

paulownia

【巻頭言】 附属学校教育局 教育長 溝上智恵子 「ポストメタバース時代の「学ぶ」を考える」

- 2 ●オンラインで実施した免許法認定公開講座 ——— 中村里津子
- 3 ●東京キャンパスにおける職業体験実習 ——— 石飛了一
- 3 ●子どもの問いや思いを生かした「STEM+総合活動」 ——— 由井薗健
- 4 ●3年ぶりの蓼科生活 ——— 奥村準子
- 4 ●高等部3年 修学旅行 ——— 吉岡美紀
- 5 ●駒場の探究 一教科の枠にとらわれない授業—福島フィールドワーク ——— 関口 岳
- 5 ●作家のガイドで彫刻のタッチツアー ——— 青松利明
- 5 ●3年生修学旅行 ——— 石黒友一
- 6 ●令和4年度理療科教員養成施設スポーツデー ——— 工藤 滋
- 6 ●協働による野外地学実習の実践 ——— 本弓康之
- 7 ●小学部1・2年生「秋の遠足」 ——— 畠山綾香
- 7 ●韓国国立ソウル聾学校とのオンライン交流 ——— 廣瀬由美
- 8 ●共生シンポジウム



「ならべて、ならべて」附属樹が丘特別支援学校小学部1・2年生

ポストメタバース時代の「学ぶ」を考える

附属学校教育局 教育長 溝上智恵子



MIZOUE
CHIEKO

2022年の日本社会は、新型コロナウィルス感染症との戦い、四半世紀ぶりの円安水準、ウクライナ侵攻といった内外の大きな出来事に翻弄されています。

こうした状況下であっても、当然ではありますが、三十年後、四十年後、あるいは五十年後の社会を見据えた人材育成が学校には求められています。現在の政治的・経済的・社会的状況を踏まえると、この当然とも言える学校への期待に対して、私たちが解決策を見出すことは容易ではないかもしれません。

しかし現在の状況が大きく変わる頃、学校教育はどのような場になっているのでしょうか。例えば、もはやICT抜きに教育という作用を語ることができないように、メタバースやポスト・メタバースの時代に、児童・生徒が「学ぶ」「考える」という行為はどのような行為になっているのでしょうか。学習方法という面からのみではなく、哲学的にも再考する時に来ているのかもしれません。筑波大学附属学校群では、未来社会のために必要な人材育成とその方法の研究開発に今後も積極的に取り組んでいきたいと思います。

オンラインで実施した免許法認定公開講座 //



情報保障 別端末で要約筆記(captiOnline)を表示

本講座は、学校教育局企画推進課と特別支援教育連携推進グループが企画・運営を行い、筑波大学人間系(障害科学域)及び附属特別支援学校と協力して開催しています。特別支援学校教諭免許状(視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱)の一種、二種免許状を取得するために必要な講座を提供しています。

今年度は、新型コロナウィルス感染症への対応に関する特例により、Zoomを用いたオンライン(リアルタイム)講

特別支援教育連携推進グループ 中村里津子

座として実施しました。受講者数は、第1欄から第3欄、全10講座合わせて421名(定員500名)でした。視覚障害者向けに拡大資料、聴覚障害者向けにパソコン要約筆記を提供する等、配慮が必要な方々への情報保障も行いました。

画面上だけでは受講生の反応を確認しにくいことがありますですが、講義が一方的にならないよう、グループディスカッションや質疑応答時間を多く設定しました。また「指導法」の講義では、附属視覚特別支援学校の教員が点字や点図などの教材を事前に準備して受講生へ送付し、実践的な内容となるよう工夫しました。

今後も、全国の特別支援教育の資質向上のために、人間系(障害科学域)と附属特別支援学校と協力しながら質の高い講座を提供していくたいと考えています。



東京キャンパスにおける職業体験実習

附属大塚特別支援学校 高等部主事 石飛了一



昨年度、本校高等部は筑波大学東京キャンパスにおける作業製品販売会を行いました。

歴代のPTAの役員の方々が、学長懇談会の折に「附属学校教育局で生徒たちが働く体験をさせて頂きたい。」という願いをお伝えし続けて下さったこと、新教育長学校訪問の際に本校生徒が行ったクッキーとカフェのサービスが溝上教育長をはじめとする学校教育局の皆様に大好評だったこと、そして何より東京キャンパス事務部学校支援課の皆様から本校生徒への確かなご理解を頂けたことが夢の実現に繋がりました。

今年度は、およそ月1回の計5回(6月、9月、12月、令和5年1月、2月)職場体験実習の機会を頂戴しています。職場体験実習の内容も発展し、昨年実施した販売会にキャンパス敷地内の清掃作業(教室や学生ホールの清掃、屋外環境整備)が加わり、高等部生徒全員で取り組むことができるようになりました。販売会にはコロナ禍にも関わらず沢山のお客様がご来場くださいり、お褒めの言葉と共に買い上げ下さいました。また、清掃活動・環境整備に取り組む生徒たちにも温かいお言葉をかけていただきました。警備員の方々も活動しやすい環境をご提供くださるとともに作業中の安全を見守って下さいました。多くの方のご理解とご協力を得て、充実した職業実習に取り組むことができています。心より御礼申し上げます。

これからも生徒が得意なことを活かした業務に取り組む「大学と連携した職業教育」の発展を目指していきます。引き続きご理解とご協力をお願いいたします。

販売会会場で接客業務に取り組む生徒



東京キャンパス屋内清掃
(3階学生ラウンジ)に取り組む生徒



子どもの問いや思いを生かした「STEM+総合活動」

附属小学校 教諭 由井薦健

本校では、「総合的な学習の時間」設立より遡ること約30年前、1971年に「総合活動」が立ち上りました。「総合活動」とは、共に幸せになるために、子どもたち一人一人の問いや思いを生かして、学習材や単元を柔軟に設定した問題解決学習として展開される活動であり、子どもたちの仲間関係を構築し、学ぶことや生きることに対する前向きな構えを形成することのできる時間です。

その「総合活動」と2000年代に米国より導入され始めた「STEM教育」とが結びつき、「STEM+総合活動」となった今も、「共に幸せになるために、子どもの問いや思いを生かす」という根幹は変わりません。私たちは、「STEM+学級総合」の「+」という記号に、子どもが本来もっている力(問い合わせ力、思いや素直さ、生き生きとした意欲)をイメージし、「STEM」については、学ぶ内容ではなく、「子どもが解決したい問題に取り組むときの方法、道具」として位置づけました。あくまで、「STEMありき」ではなく、「子どもありき」なのです。

このような「STEM+学級総合」を通して、子どもたちの前に立ちはだかるさまざまな「ハードル(問題)」について、仲間と話し合ったり、ICT機器を持ち寄ったり、協力して活動したりしながら、その解決方法を考え、実際に行動しようとする資質・能力を育成していきます。そして、このような資質・能力は、学級におけるコミュニケーション豊かな仲間関係の構築や各教科におけるICT機器を効果的に活用する姿勢にもつながっていくのです。



3年ぶりの蓼科生活

附属高校 教諭 奥村準子



附属高校では1年生の夏の恒例行事として、長野県の白樺高原（標高約1,500m）にある蓼科桐陰寮でクラス合宿を実施してきました。付き添いとして参加する先輩達との交流を深めながら標高2,531mの蓼科山に登り、スマートフォンなど電子機器を使わない不便な生活を敢えておこなうことで、日常生活を離れてクラスの団結を目指します。

コロナ禍が続く去年一昨年は中止を余儀なくされ、今年は感染対策に配慮しながら3年ぶりの実施となりました。密を避けるために桐陰寮の宿泊は断念して近くの山荘を宿舎とし、泊数を減らす等の対策を取りました。初日は小遠足や肝試しを楽しみ、2日目は蓼科山登山とキャンプファイア、3日目午前にクラスレクリエーションを実施しました。例年は朝の3時半から出発した登山ですが、今年は山荘で朝食をいただきてからの出発となるため、ゴンドラを利用して時間短縮し、正午ごろに山頂着となりました。時程の変更はありましたが、桐陰寮の管理人さんが作って下さる伝統のおにぎりは山頂でいただくと格別に美味しく感じました。

1学年の6クラスそれぞれに帯同してくれた付き添いOBOGによる手厚い支援のお陰で、生徒達は蓼科生活を満喫することができました。この3日間でクラスの団結力が高まり、高校3年間の良きスタートとなったように思います。



高等部3年 修学旅行

附属桐が丘特別支援学校 高等部教諭 吉岡美紀



7月の夏休みに、静まり返った校舎で修学旅行の出発式が行われました。当学年は感染症の影響により校外学習が軒並み中止になったため、この学年で宿泊するということを、本人たちはもちろん、教員も経験していません。2泊3日という期間がとても長いものに感じられる、緊張した出発式となりました。

初日と二日目は長野にて活動しました。戦没画学生が生前に残した絵や手紙が展示されている無言館では、当時の画学生に思いを馳せるとともに、戦争によって奪われるものの多さを感じたことと思います。また、長い歴史を有する善光寺では、建造物や回向柱の莊厳さを間近で感じることができました。

最終日は活動場所を群馬県に移して、日本で最初の官営模範製糸場である富岡製糸場を訪れました。創業当初のまま残る煉瓦造りの建物や当時使われていた機械に加え、生糸をつくる実演の見学を通して、絹産業の発展に寄与した日本の技術力の高さを知ることができました。

様々な活動がオンライン化する中、修学旅行での活動や経験を通して、実際に体験することの大切さと貴重さを改めて実感しました。残りの学校生活がより充実するよう、生の体験を大切にしながら、生徒と共に活動していきたいです。

初めての宿泊、初めての団体行動で、予定通りに進まないことも多くありましたが、バス会社や旅館の皆様のお力添えで日々無理なく過ごし、また保護者や教職員の皆様のご理解とご協力によって、修学旅行を無事終えられたことに、深く感謝申し上げます。

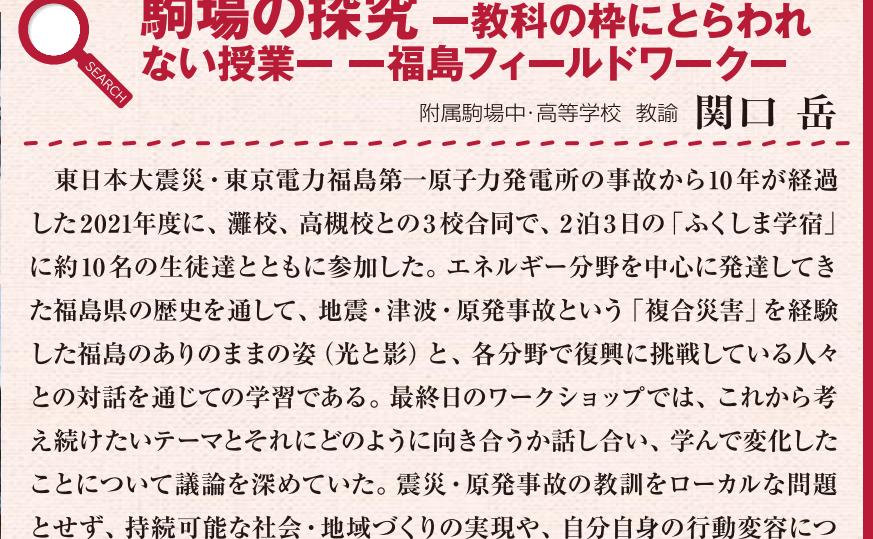




モニタリングポスト前



駒場の探究－教科の枠にとらわれない授業－－福島フィールドワーク－



附属駒場中・高等学校 教諭 関口 岳

震災遺構となっている浪江町立請戸小学校

富岡町に残る帰還困難区域

東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所の事故から10年が経過した2021年度に、灘校、高槻校との3校合同で、2泊3日の「ふくしま学宿」に約10名の生徒達とともに参加した。エネルギー分野を中心に発達してきた福島県の歴史を通して、地震・津波・原発事故という「複合災害」を経験した福島のありのままの姿(光と影)と、各分野で復興に挑戦している人々との対話を通じての学習である。最終日のワークショップでは、これから考え続けたいテーマとそれにどのように向き合うか話し合い、学んで変化したことについて議論を深めていた。震災・原発事故の教訓をローカルな問題とせず、持続可能な社会・地域づくりの実現や、自分自身の行動変容につなげ、将来について自分事としてどう生かすかということである。





作家のガイドで彫刻のタッチツアー

附属視覚特別支援学校 高等部主事 青松利明

4月22日、公益社団法人日本彫刻会が東京都美術館で開催していた「第51回日彫展」に高等部3年生が出かけました。作家1名に対し生徒2名で、丁寧な説明を受けながらたくさんの彫刻に触れ、作家の思い、素材の違い、様々に表現されている形を体感しました。また、別室では、彫刻の作り方や表現することの意味、視覚障害者の美術館アクセスの課題等について説明を受けました。作家の中には、筑波大学の卒業生等も多く含まれていました。生徒の感想の中には、「彫刻は絶対に見るだけではなく触らないと面白さは十分に伝わらないような気がした。これは私自身に視覚障害があるからではなく、健常者の方にもお勧めしたい。」というものもありました。





3年生修学旅行

附属中学校 教諭 石黒友一

本年度の修学旅行は、5月10日～13日の3泊4日で、3日目までは、文学、大井川、自然、生活の各コースに分かれての学習、3日目夕方から最終日にかけては学年全体で活動する形で行いました。コロナ禍による制約などもあり例年とは異なる形での修学旅行でしたが、その中でコースごとに事前学習に取り組み、当日、現地に出向いての学習も充実したものとなりました。また、学年全体で過ごした1日は、あいにくの天候となってしまいましたが、友と共に楽しく過ごす子どもたちの様子をたくさん見ることができました。

個人として、学年として大きく成長するステップとなった、修学旅行でした。



令和4年度 理療科教員養成 施設スポーツデー

理療科教員養成施設 助教 工藤 滋

江島杉山神社



理療科教員養成施設では、毎年5月に全体行事として、施設生の企画によるスポーツデーを開催しております。この行事は、スポーツを通じて、学年を超えた在学生同士、さらには在学生と教職員間の親睦を深めることを目的としているものです。今年度は5月14日(土)に、東京都墨田区にある江島杉山神社の見学後、東京スカイツリーまでウォーキングし、展望台からの眺望を楽しむという内容でした。

参加者は、在学生26名と教職員4名でした。

杉山和一は、江戸時代の5代將軍徳川綱吉の病気を治した全盲のはり師で、教育施設を開設し、あん摩やはりを視覚障害者の職業として確立した人です。そこで卒業後、理療科教員となって全国の視覚特別支援学校に赴任した施設生達が、東京への研修旅行等で訪れる場所として、ここを知っておくことも必要と考えた訳です。

そこから隅田川に沿ってスカイツリーまで歩きました。在学生の多くは視覚障害者ですが、数名の晴眼者も在籍しています。そこで視力のある者は周囲の様子を言葉で説明し、視覚障害者はよりよい移動介助の方法を伝え、お互いに情報をギブ・アンド・テイクし合って、楽しく有意義な時間を過ごしました。そしてこの日の私の万歩計は19822歩を記録していました。確かに存分にスポーツを満喫できた1日だったと言えそうです。

スカイツリーに向かって
ウォーキング



スカイツリーで集合写真



協働による野外 地学実習の実践

附属坂戸高等学校 主幹教諭 本弓康之

ゾウの骨格観察



新型コロナウイルス感染拡大のため中止していた長野県信濃町での野外地学実習を、感染対策に注意しながらこの夏再開しました。

この地学実習は、これまで附属坂戸高校が実践している総合地球科学入門という異学年協働による地学実習に、国際バカロレア・ディプロマプログラムIBDP理科実習「グループ4プロジェクト」で求められる様々な生徒が科学的トピックに協働して取り組むことや科学技術の環境的、社会的、倫理的意味を理解することなどの要件を盛り込み実施しています。

今年度は、野尻湖ナウマンゾウ博物館での発掘化石の観察実習、C.W.ニコル・アファンの森財団「アファンの森」での自然観察実習、露頭調査班、ハンドオーガを使ったボーリング調査班、野尻湖の外来生物調査班、昆虫化石調査班の4つのグループに分かれての調査実習等を行いました。

コロナ禍で学校外での活動が制限されていた生徒にとって久しぶりの校外活動で、「コロナの影響で何をするにもオンラインだった中で、実際に自分の目で見て肌で感じることが重要だと思った」「実習を通して地学は一つの手がかりからいろいろなことが分かるという部分が面白く、そこに魅力を感じるようになった」などの感想が聞かれました。



ボーリング調査



露頭観察

小学部1・2年生「秋の遠足」

附属久里浜特別支援学校 教諭

畠山綾香



カピバラとの触れ合い

羊の餌やり体験



9月中旬、小学部1・2年生は、秋の遠足で長井海の手公園ソレイユの丘に行ってきました。ふれあい動物村・芝そりゲレンデ、キッズガーデンで活動し、水上ステージでお弁当を食べました。

事前学習が始まった頃から、「動物！行く！」と言ったり、カレンダーの遠足の日を指さしたりして、楽しみにしている児童が多くいました。前日には、しおりにシールを貼って完成させながら、遠足の行程を確認して当日を迎えるました。

当日は、真夏のような日差しに負けない元気いっぱいの笑顔で、大好きなスクールバスに乗って出発しました。バスから見える景色としおりを交互に眺めていた児童は、ソレイユの丘の看板が見えてくると、満面の笑みで身体を揺らして、早く行きたい気持ちを表現していました。

ふれあい動物村では、羊の餌やり体験をしたり、カメの

硬い甲羅やうさぎのふわふわの背中を触ったりして触れ合うことができました。事前学習で動物クイズ動画を見て、動物の名前を覚えた児童は、本物を目の前にし、「マーラ！」「カンガルー！」と言って大興奮で動物に近付き、見入っている様子が印象的でした。芝そりゲレンデでは、頑張って長い坂を上がった甲斐があり、気持ち良く風を感じながらそり滑りを楽しむことができました。キッズガーデンでは、滑り台やブランコなどのたくさんの遊具に囲まれて気分も高まり、元気いっぱい体を動かして遊んでいました。今後も感染症対策を徹底した上で、幼児児童にとって、楽しく学びのある学習や活動を行っていきたいです。

2年生集合写真



韓国国立ソウル聾学校とのオンライン交流

附属聴覚特別支援学校中学部 教諭 廣瀬由美



日本の指文字の「ㄎ」を教えている様子

附属聴覚の中学校では、7月15日（金）に韓国国立ソウル聾学校とのオンライン交流が3年ぶりに行われました。

新型コロナウイルス感染症の流行前は、1年生が年2回オンラインで交流を行ってきました。コロナ禍で交流が中止となり、今年度の2、3年生は交流の経験がなく、昨年度経験できなかった2年生から是非参加したいという声が多くあがったため、今回は1、2年生合同で交流を行うことになりました。6月から韓国語や韓国文化について基本的なことを学び、自己紹介やお互いの学校・国についての質疑応答の準備を行いました。言語や手話が違うことでコミュニケーションに不安をもつ生徒が多く見られましたが、準備した視覚的な資料を十分に活用しながらやりとりを行うことができました。はじめのうちは緊張した表情の生徒達も交流が進むにつれ少しづつ緊張が解け、ソウル聾学校の生徒

の手話を見ながら、「『筑波』の手話を教えたい」、「日本の指文字を教えよう」など、主体的に関わる様子が見られました。

例年12月に2回目の交流が文化祭の展示発表を踏まえて行われています。具体的な内容についてはこれから相談していくますが、今年度も2回目の交流に向け1年生同士でテーマを決めて準備し、オンライン交流を行う予定です。

2018年に締結された5年間の国際交流協定が来年5月で満了となります。よい形で節目の年を迎えられるように準備を進めていきたいと思います。



ソウル聾学校の代表生徒挨拶を聞いている様子



本校の生徒が質問に答えている様子

— 共生シンポジウム —

令和4年
12月11日(日)

13:00-15:30

13:00 開会
13:03 教育長挨拶
講師紹介
13:10 第1部
14:10 第2部
15:10 質疑応答
15:25 次長感想
15:30 閉会

【申込方法】

11月30日までにインターネット
<http://urx.blue/kxtv>より
お申し込みください。



<http://urx.blue/kxtv>

Zoom
(ウェビナー)
オンライン配信

第1部 講演

「共に生きる」って
なんだろう?

講師
平川 美穂子 氏



生後1年ほどで高熱の後失聴。
東京教育大学附属聴学校（現筑波大学附属聴覚特別支援学校）幼稚部に学び、小学5年より普通校にインテグレーションする。
筑波大学第二学群人間学類心理学専攻卒業。
筑波大学大学院心身障害学研究科修了、教育学博士。
翻訳業・聾学校教諭を経てIT企業にSEとして23年間勤務し、その後介護退職。
仕事の傍ら特定非営利活動法人日本聴覚障害者コンピュータ協会理事長・副理事長を務めた。
毎日小学生新聞に、「たかねきゃら」のペンネームで子どもに向かって手話漫画「ててもだら」を連載（1993～2002年）。
（『参加一耳が聞こえないということ』より）

【著書】
『参加一耳が聞こえないということ』（2016）
附属聴覚特別支援学校企画・編集の季刊『聴覚障害』に、
2020年度春号から「シリーズ共に生きていますか」を連載中。



第2部 発表リレー テーマ 『交流活動を通して』 ※各校3分程度

designed by Sakurai Hina
Special Needs Education School for the Deaf,
University of Tsukuba

筑波大学附属学校教育局



IMAGINE THE FUTURE.

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事來歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



発行日………令和4(2022)年10月31日

発行者………附属学校教育局教育長 溝上智恵子

発行所………筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン………スピーチ・バルーン

印 刷………広研印刷 使用紙: U-limax [日本製紙]

